

指導と評価の一体化に向けた取組

－「話すこと〔やり取り・発表〕」の評価の試み－

春日井市立西山小学校 教諭 高橋 健太

1 学校・児童の実態

本校は、春日井市の中央部に位置し、校区内にサボテン園や桃、ぶどうの果樹園が点在し、田園風景の残る緑豊かな地域である。全校児童数は約300名の小規模校であり、校訓「心豊かな、活力ある児童の育成」の教育目標を下に、本年度の重点努力目標として、知・徳・体の調和のとれた人間形成を目指して、さまざまな取組を行っている。

春日井市では、新学習指導要領への移行期間の平成30年度から外国語活動の専科指導教員が配置され、本校では、専科指導教員が3～6年生の8学級の外国語活動を担当している。外国語活動の授業時数は、どの小学校も中学年で15単位時間、高学年で50単位時間である。

本校の6年生は、外国語の学習に対し意欲的な児童が多く、分からない表現があると互いに教え合う姿も見られる。平成31年3月に5年生児童に実施したアンケート結果によると、55人中51人の児童が「英語はとても好き」「好き」と回答した。また、学校以外で英語を習っている児童が4割近くいるが、外国語活動の授業では、学習した表現をその単元では使うことができても、違う単元では忘れていたり、どのように使えばいいのか分からなかったりする児童が多いという実態がある。

2 ねらい

新学習指導要領では高学年で外国語科が導入され、教科としての学習が始まる。慣れ親しむことが目標であった外国語活動と違い、外国語科の「知識及び技能」の目標では、「実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」とある。外国語科では、学習した単元の中で新しい語や表現を使用するだけでなく、言語活動を通して、既習表現を想起しながら使用することで定着を図る必要がある。そこで、高学年で設定されている Small Talk の活動を充実させることで、既習表現を想起しながら、児童が自分の考えや気持ちを表現できるようになると考えた。また、児童の理解や定着を見取る方法の試みとして、ルーブリックによる「話すこと（やり取り・発表）」のパフォーマンス評価に取り組む。

3 実践手だて

(1) 手だて

ア Small Talk の指導の工夫

「話すこと〔やり取り〕」の言語活動の一つである Small Talk を継続的に取り入れ、教師が既習表現や対話を続けるための基本的な表現を繰り返し使用することで、児童が既習表現を想起しながら、自分の考えや気持ちを伝え合えるようにする。また、「CAN-DO リスト」を作成し、Small Talk で使える表現を適時、確認できるようにする。

イ ルーブリックを活用したパフォーマンス評価

パフォーマンステスト（「話すこと」）のルーブリックを、単元の始めに児童に提示することで、パ

フォーマンステストに向けて具体的な目標をもって活動に取り組むことができるようにする。

(2) 指導の実際と考察

ア Small Talk の指導の工夫

(ア) 既習表現の定着

高学年で単元の導入や新出表現の導入の前に Small Talk を、2 時間に 1 回程度設定した。5 年生では、教師と児童のやり取り（資料 1）が中心であったが、6 年生では、教師同士だけでなく、児童同士のやり取り（資料 2）も取り入れた。また、既習表現の定着を図るため、学習した表現やその単元で児童に使わせた表現を、教師が Small Talk の中で意図的に使用した。

Small Talk を始めた頃は、“Yes / No” や単語だけで答える児童や日本語を使う児童がいたが、使える表現が増えるにつれ、文で答えたり、既習表現で伝えようとする姿が見られるようになった。また、教師の英語が理解できず、教師が話している内容が分からない児童もいるが、教師と児童のやり取りを繰り返し聞いたり見たりすることで、推測しながら、徐々に内容を理解できるようになった。

6 年生の児童同士の Small Talk では、やり取りの中で言いたいけれど言えなかった表現について考える時間を設定した。1 回目のやり取りが終わった後に、学級全体で共有し、それらの表現方法を確認した。ここでは、教師がすぐに英語の表現を教えるのではなく、既習表現であるが忘れていた表現やクラスの誰かが知っている表現などを児童の発言から引き出すようにした。また、既習表現で言い換えることで、自分の伝えたいことを英語にできないかを児童に考えさせるように配慮した。

【資料 1 5 年生 Small Talk の例】

【資料 2 6 年生 Small Talk の例】

<p>T : Ms. Tanaka, she is good at playing the recorder. I'm good at playing the recorder. I can play the recorder. But, I can't play the piano. Are you good at playing the recorder? "Yes, I am" or "No, I'm not." —教師と児童のやり取り— (児童が Yes で答えた場合) S : Yes, I am. T : Oh, you are good at playing the recorder. Great. (児童が No で答えた場合) S : No, I'm not. T : You are not good at playing the recorder. That's OK. T : He is good at cooking. He can cook <i>gyoza</i> very well. How about you? Are you good at cooking? S : Yes, I am. T : Great. So, you can cook well. What can you cook?</p>	<p>T : My summer vacation. I went to Okinawa. I went to the sea. I enjoyed snorkeling. I ate mango shaved ice. How was your summer vacation? Talk with your partner. —児童同士のやり取り (1 回目) — S1 : Hello. S2 : Hello. S1 : How was your summer vacation? S2 : I went to the sea. I enjoyed swimming. I ate shaved ice. S1 : Oh, you went to the sea. Great. S2 : How about you? S1 : I went to an amusement park. I enjoyed riding a roller coaster. I ate ice cream. —学級全体での振り返り— —児童同士のやり取り (2 回目) —</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(イ) 対話の続け方の指導

Small Talk の中で、教師が、児童の答えに感想を言ったり（「Reaction」）、児童の答えを復唱して確かめたり、（「Repeat」）、習った表現を使って更に質問をしたり（「Question」）することを意識した。特に、「Reaction」については、Small Talk の場面では、児童の答えに対して、教師がさまざまな英

語の表現で一言感想を言うようにした。対話を続けるためのポイント（資料3）を教室に掲示し、児童同士のやり取りの度に確認した。

5年生の単元 We Can! 1 Unit 5 「She can run fast. He can jump high.」では、友達と尋ね合う活動の前に、どのような「Reaction」の表現があるか、学級全体で確認する場を設定した。そして、「相手の答えにリアクションしながら尋ね合おう」という目標を設定し、児童同士がやり取りする中で、対話を続ける表現の定着を図った。それ以降の授業では、児童同士のやり取りを行う際に、必ず、相手の言ったことに対して一言感想を言うように児童に声かけをした。また、相手の話した内容を繰り返す「Repeat」については、「キーワード・ゲーム」や「チェーン・ゲーム」の活動を通して、児童が自然と取り組めるようにした。

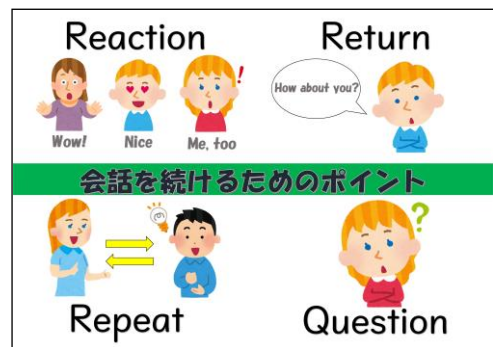
欲しいものを尋ね合う活動を設定した単元では、「相手の言ったことをくり返しながら会話しよう」という目標を設定した。その後のやり取りの活動では、自分が答えた後に相手に質問すること（「Return」）や相手の話を聞いた後に内容に関わる質問をすること（「Question」）を常に指導した。しかし、疑問詞を含む基本的な表現を使う場面や方法を理解できていない児童が多かった。Small talkの中で、疑問詞を含む基本的な表現を教師が積極的に使うことで、児童に気付きを促す必要があった。

(ウ) 「CAN-DO リスト」による既習表現の確認

「CAN-DO リスト」として、6年生で学習する表現を一覧にしたものを作成した（資料4）。4月の授業開きのときに児童に配付し、内容を説明した。リストの右側の「ふりかえり」の欄は、単元終了時に、「自分の力で正確にできる」「自分の力でだいたいできる」「手助けがあればできる」の三段階で児童が学習を振り返り、色を塗ることとした。単元終了時にすべて色が塗れなくても、違う単元で言えるようになったら塗ってよいことも伝えた。また、「CAN-DO リスト」を教室に提示するだけでなく、児童には、A4判にした「CAN-DO リスト」を各自の学習ファイルに貼ることで、児童がいつでも自分で確認できるようにした。

児童は、単元終了時にその単元を振り返りながら、できるようになったことに色を塗ることで、既習表現の定着度が視覚的に分かり、児童自身の達成感につながった。また、「○○ができるようになりたい」という意欲にもつながった。さらには、言語活動の中で自分の気持ちや考えを伝える場面で、自分の使いたい表現を「CAN-DO リスト」で確認している児童もいた。

【資料3 対話を続けるためのポイント】



【資料4 6年生の「CAN-DO リスト」】

Grade 6 We Can! 6年生でできること Speaking		
英語で言える。たずねることができる。		
単元	できること	ふりかえり
全体	曜日・日にち・天気 It's Monday. It's May 3rd. It's sunny.	○ ○ ○
全体	リアクション Nice. Good. I see. Wow. Me, too.	○ ○ ○
全体	リピート 相手の答えをくり返す	○ ○ ○
全体	リターン 相手に聞き返す How about you?	○ ○ ○
①U2	月名 January, February, March	○ ○ ○
①U2	誕生日 My birthday is ~.	○ ○ ○
②U1	自己紹介 I'm ~. I like ~. I can ~. I'm good at ~.	○ ○ ○
①U6	国名 Japan, France, America	○ ○ ○
①U6	行きたい国 I want to go to ~.	○ ○ ○
①U6	行きたい国の理由 I want to see / eat /	○ ○ ○
①U6	行きたい国をたずねる Where do you want to go?	○ ○ ○
①U4	時刻 6:00, 7:30	○ ○ ○
①U4	一日の生活 I get up at 6.	○ ○ ○
①U4	日課をどの程度行うか I usually wash the dishes.	○ ○ ○
①U4	何時にするかたずね方 What time do you ~?	○ ○ ○
②U5	夏休みの思い出、行ったところ I went to ~.	○ ○ ○
②U5	楽しんだこと、食べたもの、見たもの I enjoyed / ate / saw	○ ○ ○
②U5	感想 It was ~.	○ ○ ○
②U4	施設名 station, library	○ ○ ○
②U4	春日井市にあるもの、ないもの We have ~. We don't have ~.	○ ○ ○
②U4	春日井市に欲しいものと理由 I want ~.	○ ○ ○
②U8	職業 doctor, teacher, dentist	○ ○ ○
②U8	就きたい職業とその理由 I want to be a ~.	○ ○ ○
②U8	就きたい職業のたずね方 What do you want to be?	○ ○ ○
②U7	学校行事 school trip, entrance ceremony	○ ○ ○
②U7	小学校生活の思い出と理由 My best memory is ~. I enjoyed ~.	○ ○ ○
②U7	一番の思い出のたずね方 What's your best memory?	○ ○ ○
②U9	部活動名 basketball team, brass band	○ ○ ○
②U9	中学校で入りたい部活動と理由 I want to join ~.	○ ○ ○
②U9	中学校で楽しみなことと理由 I want to enjoy ~.	○ ○ ○

L4---Hi, friends! 1 Lesson4 ①U4---We Can! 1 Unit4 ②U9---We Can! 2 Unit9

3段階でふりかえって、色をぬろう。

①手助けがあればできる。 ● ○ ○
 ②自分の力でだいたいできる。 ● ● ○
 ③自分の力で正確にできる。 ● ● ●

イ ルーブリックを活用したパフォーマンス評価

(ア) ルーブリックの作成・共有

単元目標や「CAN-DO リスト」を基に、パフォーマンステストのルーブリックを作成した。まず、単元目標から、活動をどのように評価するか観点を考え、新学習指導要領の「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到合わせた評価基準（資料5・資料6・資料7）を作成した。それぞれの観点的評価を「A（がんばっている）」「B（活動の目標に沿って伝えることができた）」「C（もう少しがんばりが必要）」の3段階で示した。また、それぞれの観点的評価で顕著によかった様子が見られた児童には、「A+」の評価を与えることとした。

【資料5 単元計画とルーブリック①】

単元	令和元年度 6年生 We Can! 2 Unit 1 「This is ME! 自己紹介」			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介に関する表現や好きなこと、できることなどを聞いたり言ったりすることができる。（知識及び技能） 自己紹介で自分の好きなことやできることなどについて伝え合う。（思考力、判断力、表現力等） 他者に配慮しながら、好きなことやできることなどについて伝え合おうとする。（学びに向かう力、人間性等） 			
単元計画	第1時 好きな動物を含めて自己紹介する。 第2時 できること（得意なこと）を含めて自己紹介する。 第3時 好きな教科を含めて、より詳しく自己紹介する。 第4時 中学校で初めて会う友達に向けた、よりよい自己紹介をする。			
ルーブリック		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
		自己紹介で、どれだけの内容を、自分の力で伝えているか	自己紹介でどのようなことを伝えているか	相手に分かりやすく伝えているか、相手に伝えることを意識しているか
	A	だいたい正確な英語で話せる。	四つのこと以外にも伝えている。	自己紹介としてよいところがある。
	B	自分のことについて、名前を含めて四つのが話せる。（出身、好きなもの、持っているもの、できること、得意なこと、誕生日、欲しいものなど）	自分のことを考え、自己紹介している。	自己紹介として適切である。（最初の挨拶や終わりの挨拶を言う、名前を最初に言う）
C	自分のことについて、名前を含めて四つのが話せていない。先生や友達の助けが必要である。	自己紹介していない。自分のことを話していない。	自己紹介として適切ではない。	

【資料6 単元計画とルーブリック②】

単元	令和元年度 6年生 We Can! 1 Unit 6 「I want to go to Italy. 行ってみたい国や地域」			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 国名や行きたい場所について、聞いたり言ったりすることができる。また、それらを書き写すことができる。（知識及び技能） 行きたい国について理由も含めて伝え合う。（思考力、判断力、表現力等） 他者に配慮しながら、行きたい国について説明したり、自分の考えを整理して伝え合ったりしようとする。（学びに向かう力、人間性等） 			
単元計画	第1時 国名の言い方を知る。 第2時 行きたい国について尋ねたり、答えたりする。 第3時 行きたい理由について伝える言い方を知る。 第4時 行きたい理由を含めてインタビューに答える。 第5時 行きたい国のよさが伝わるようにインタビューに答える。			
ルーブリック		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
		行きたい国について、どれだけの内容を、自分の力で伝えているか	行きたい理由についてどのようなことを答えているか	相手に分かりやすく伝えている。相手に伝えることを意識している。
	A	行きたい国とその理由について正確な英語で答えることができる。	行きたい理由について詳しく伝えている。	よいインタビューの答え方をしている。
	B	行きたい国1か国とその理由について二つ以上答えることができる。	質問に適切に答えることができる。	行きたい国やしたいことについて、相手に伝わるようにインタビューに答えている。
C	行きたい国や理由について話せていない。先生の助けが必要である。	質問に適切に答えることができない。	インタビューに答えていない。	

【資料7 単元計画とルーブリック③】

単元	令和元年度6年生 We Can! 1 Unit 4 「What time do you get up? 一日の生活」			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・一日の生活について聞いたり言ったりすることができる。(知識及び技能) ・一日の生活に関するまとまりのある話を聞いておおよその内容を捉えたり、一日の生活について伝え合ったりする。(思考力, 判断力, 表現力等) ・他者に配慮しながら, 自分の一日の生活について伝え合おうとする。(学びに向かう力, 人間性等) 			
単元計画	第1時 時刻や生活の動作の言い方を知る。 第2時 何時に何をするか一日の生活を伝える。 第3時 日課を週にどのくらいするか伝える。 第4時 家での役割も含めて一日の生活を伝える。 第5時 自分の一日の生活について, みんなに伝わるように発表する。			
ルーブリック		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
		一日の生活について, どれだけの内容を自分の力で伝えているか	一日の生活についてどのようなことを伝えているか	相手に分かりやすく伝えている。相手に伝えることを意識している。
	A	一日の生活について, おおよそ正確な英語で話せる。	今までに習った表現を使って詳しく伝えている。	相手を意識した発表をしている。
	B	一日の生活について, 家での役割や頻度, 時刻も含めて四つのことが話せる。	自分の一日の生活を考え, 発表している。	相手に伝わる発表をしている。最初と最後に挨拶をしている。
	C	一日の生活について, 四つのことが話せていない。先生や友達の助けが必要である。	自分の一日の生活を考え, 発表していない。自分のことを話していない。	最初と最後に挨拶をしていない。

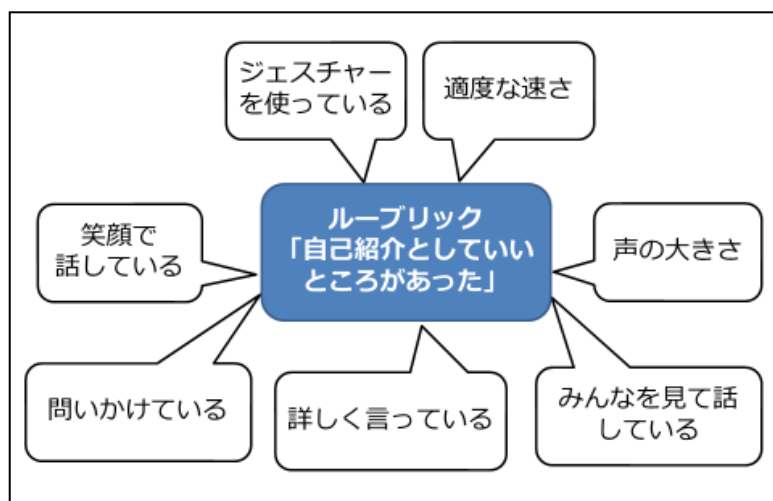
このように作成したルーブリックを, パフォーマンステストを行う単元の始めやパフォーマンステストの前時に児童に示し, 目標や評価の観点を確認した上で, 児童同士での発表ややり取りに取り組むこととした。なお, 移行期間である令和元年度の6年生は, 児童の実態に応じて, 「Hi, Friends 1・2」「We Can 1・2」の中から教材を選んで単元計画を作成した。

(イ) パフォーマンステストに向けた指導

① 令和元年度6年生の実践: We Can! 2 Unit 1 「This is ME! 自己紹介」

本校の6年生は1学年2学級と人数が多くないため, 学年が始まった4月の時点でも, 児童同士はお互いをよく知っている。そこで, 5月に外国語活動で行う自己紹介は, 「中学校に入学して, 新しい友達に出会った時」という場面設定で取り組んだ。まず, 自己紹介のモデルとして, Unit 1【Let's Watch and Think②】(本文中の【 】は小学校外国語教材で設定されている活動名を表す。以下同様)の映像や教師の自己紹介を見せた後, 児童が自分の自己紹介の内容を考えた。Unit 1【Let's Watch and Think②】に収録されている4人の自己紹介のうちの一つを, 毎時間, 視聴させ, どのようなことを言っているか, 細かく聞き取らせ, 聞き取れた英語を全体で確認した。「1回目の視聴→聞き取れたことの確認→1文ずつ区切りながら2回目の視聴→聞き取れなかった語句の確認→3回目の視聴」という同じ流れで毎時間行った。デジタル教材の映像が, 児童が理解したり, 繰り返し視聴するのに適度な長さであるとともに, さまざまな既習表現が使われていることで, 児童は自分の自己紹介の

【資料8 「自己紹介としてよいところ」についての児童の意見】



のことで, 児童は自分の自己紹介の

作成に役立てることができた。

Unit 1 では、デジタル映像を視聴後、Small Talk でやり取りを行い、ペアで自己紹介をする活動を毎時間設定した。自己紹介の内容に必ず入れることとして、「第1時：好きな動物」「第2時：できること」「第3時：好きな教科」と教師が示すことで、児童は自己紹介の内容を少しずつ増やすことができた。教師が示した内容は、5年生で学習したことが中心だったため、既習表現を想起する機会にもなり、定着を図ることができた。

ルーブリックの「主体的に学習に取り組む態度」の観点にある「自己紹介としてよいところがある」については、Unit 1 【Let's Watch and Think②】の映像や教師の自己紹介を参考に、どのような紹介がよいか児童が考え、学級全体で共有したものの（資料 8）を目標として児童に提示した。

② 令和元年度6年生の実践：We Can!1 Unit 6「I want to go to Italy. 行ってみたい国や地域」

6月には、「行きたい国について、その国のよさが伝わるようにインタビューに答える」ことを目的に、単元を計画した。世界の国についてよく知らず、行きたい国が思いつかない児童が多かったため、教師が世界の国々の資料を準備し、児童がそれらを参考にしながら、行きたい国とその理由を考えるようにした。第4時では、自分の行きたい国の魅力を伝えるポスターを作ることで、児童がその国に行きたい理由を整理できるようにした。そして、Unit 6 【Let's Watch and Think②】の街頭インタビューの映像（資料 9）を視聴し、インタビューの応答や行きたい理由を詳しく伝える表現を理解できるようにした。また、Small Talk では、行きたい国についての教師同士のやり取りを見た後、児童同士でやり取りした。中には、行きたい国はあっても、行きたい理由を自分で英語にすることができない児童もいるため、やり取りの中で、教師が児童に“Is it beautiful?”と尋ねることで、“It's ~.”という表現で理由を表すことを示した（資料 10）。このように、児童が分からない表現を教師がすぐに教えるのではなく、やり取りの中で教師が既習表現を使うことで児童に気付きを促すようにした。また、こうした教師と児童とのやり取りを繰り返すことで、児童同士のやり取りでも使えるようになっていった。

【資料 9 Unit 6 Watch and Think②の内容】

(イ：インタビュアー、女：インタビューされる女性)
イ：Where do you want to go?
女：I want to go to Egypt.
イ：Egypt? Why do you want to go to Egypt?
女：You can ride camels. I want to eat “moussaka.”
I want to see the Pyramids.
イ：Sounds great! Anything else?
女：Oh, and I want to visit Cairo.
I hear it's very exciting.
イ：Thank you very much.

【資料 10 6年生 Small Talk の様子（一部）】

T : I want to go to Germany. I want to see a castle. It's great. I want to eat sausages and “kohlrouladen.” They are delicious. I want to drink beer. I like beer.
T : Where do you want to go?
ALT : I want to go to China.
T : You want to go to China. Why?
ALT : I want to see pandas. It's cute.
T : Nice. Do you like pandas?
ALT : Yes, I do. I like pandas.
T : Where do you want to go, S1?
S1 : I want to go to America.
T : America. Good. Why do you want to go to America?
S1 : I want to see the Grand Canyon.
T : Oh, the Grand Canyon. Why? Is it beautiful?
S1 : Yes. It's beautiful.

③ 令和元年度6年生の実践：We Can! Unit 4 「What time do you get up? 一日の生活」

7月には、「一日の生活についてクラスみんなに知ってもらおう」という場面設定でスピーチの発表をすることとした。これは、家庭科で児童が自分の一日の生活時間の使い方を調べた学習に関連付けて行った。そして、学習した一日の生活についての表現を、単元末のスピーチ発表で使えるように、毎時間ペアでの伝え合いの活動を取り入れた。伝え合いの活動では、「第2時：何時に何をするか」「第3時：頻度を含める」「第4時：家での役割を含める」のように、内容の条件を教師が示して、活動に取り組むこととした。

また、単元末のスピーチ発表のモデルを児童に示すために、ALTが自分の一日の生活について発表の様子を撮影し、児童はその映像を視聴した。ルーブリックの「主体的に学習に取り組む態度」については、5月の自己紹介の発表のときと同じように、どのような発表が相手に伝わるかを児童に考えさせ、学級全体で共有した。5月には出なかった、「文と文との間」や「声の抑揚」についての意見が児童から出た。5月の自己紹介の発表では、相手を意識することが不十分だったため、重点的に指導した。

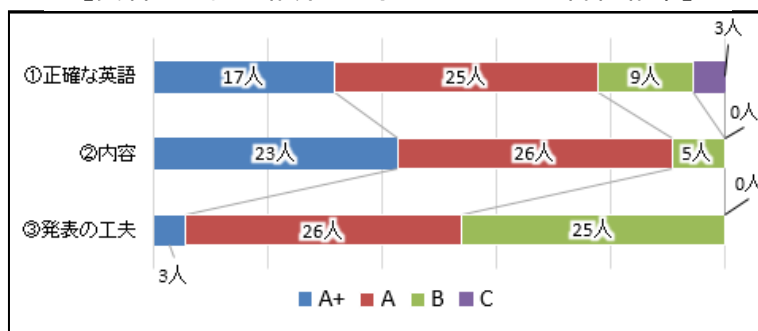
このように、単元の最初にパフォーマンス評価の観点を児童に示したり、観点について児童と一緒に考えたりすることで、児童は具体的な目標をもって練習に取り組んだり、振り返りカードに「本番では全部、A評価にしたい」などと意欲を高めたりする姿が見られた。さらには、単元末のパフォーマンステストに向けて、休み時間や帰宅後に練習に取り組んだり、学年で取り組んでいる家庭学習として、ノートに発表内容を書いたりする児童もいた。また、教師はルーブリックを基に毎時間、児童の学習の様子からできていることや不十分なことを見取り、不十分なことについては、次の指導内容や方法を改善しながら、単元を進めることができた。

(ウ) パフォーマンステストの実施と評価

① 自己紹介のスピーチのパフォーマンス評価

5月に自己紹介のスピーチを「話すこと〔発表〕」のパフォーマンステストとして実施した。学級を2グループに分け、児童は学級の半分の人数の児童の前で発表した。発表を聞く児童は、発表者のよいところをメモしながら聞くように指示した。ルーブリックを提示した初めてのパフォーマンステスト

【資料11 自己紹介パフォーマンステスト評価結果】



であったが、児童はルーブリックの項目を意識して、発表することができた。

ルーブリックを基にした教師の評価結果は、「知識・技能」の観点とした「①正確な英語」については、54人中42人の児童がA評価以上となり、その中の17人は「A+」であった（資料11）。単元の最初では誤って理解していた児童も、単元末のパフォーマンステストに向けて準備や練習を進める過程で、正しい英語に修正して発表することができた。

「思考・判断・表現」の観点とした「②内容」については、54人中49人の児童がA評価以上となり、ほとんどの児童が学習した表現を使って積極的にさまざまなことを伝えることができた。中には、5年生で学習した内容を思い出し、並列の三つ以上の語を結ぶとき（「～，～ and ～」）に“and”を正しく使って話したり、程度を表す“very much”“well”などの副詞を使って、より詳しく伝えたりした児童も多くいた。

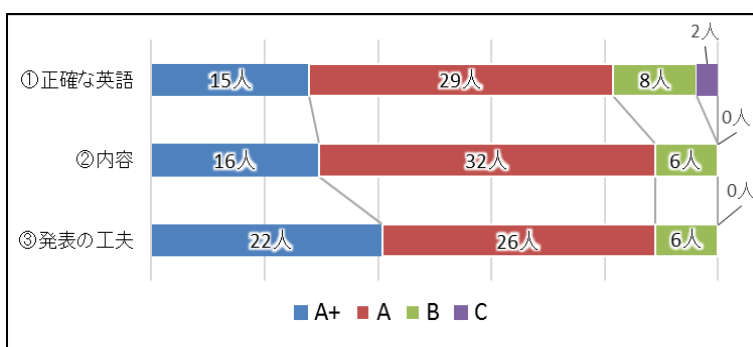
「主体的に学習に取り組む態度」の観点とした「③発表の工夫」については、54人中29人の児童が、声の大きさ、ジェスチャーや問いかけなど、相手を意識した発表ができた。実際に評価をすると、「A」と「B」の評価の判断が難しく、評価の観点や基準を検討する必要があると感じた。

② 行きたい国の紹介のパフォーマンス評価

6月に教師によるインタビューの応答を「話すこと〔やり取り〕」のパフォーマンステストとして実施した。児童が、作成したポスターを使いながら自分が行きたい国を教師に紹介した後、教師は児童にインタビューをした。教師は、“Do you like ~?” や “What~ do you like?” などと、Unit 6で児童が学習した表現を使って質問をし、既習表現がどの程度定着しているかも確認した。また、児童は必ず教師に質問することとし、教師の答えに対して「Reaction」「Repeat」「Question」などのUnit 6で重点的に指導してきた対話を続けるためのポイントを意識できるようにした。

ルーブリックを基にした教師の評価結果は、「知識・技能」の観点とした「正確な英語」については、54人中44人の児童が行きたい国とその理由について正確な英語で伝えることができた（資料12）。児童の誤りとしては、教師に質問する際に“Do you like ~?”ではなく、“You like ~?”と質問していたり、理由を答える際に“it's beautiful.”の“it's”が抜けていたりなどがあった。

【資料12 行きたい国パフォーマンステスト評価結果】



「思考・判断・表現」の観点とした「②内容」については、54人中48人の児童が

A評価以上となり、質問されたことに適切に答えたり、教師に対しても質問したりすることができていた。また、多くの児童が学習した表現を想起しながら積極的にさまざまなことを伝えることができ、自分のことを話すだけでなく、相手のことも尋ねることができた。理由を尋ねる際に、“Why?”ではなく、“Why do you want to go to America?”という文で言えた児童がいた。パフォーマンステストに向けて、デジタル教材の【Let's Watch and Think】の映像やSmall Talkでの教師の英語の中で繰り返し触れた表現だったため、パフォーマンステストで使ってみようとした児童が現れたと考える。不十分だった点としては、対話を続けるための追加の質問の表現が乏しく、ほとんどの児童が“Do you like ~?”を使っているのみだった。

「主体的に学習に取り組む態度」の観点とした「③発表の工夫」については、54人中48人の児童がA評価以上となり、相手を見ながら話していたり、うなずきながら聞いたりしていた。また、教師の答えに対して、反応したり、答えを繰り返したりすることができた児童も多くいた。

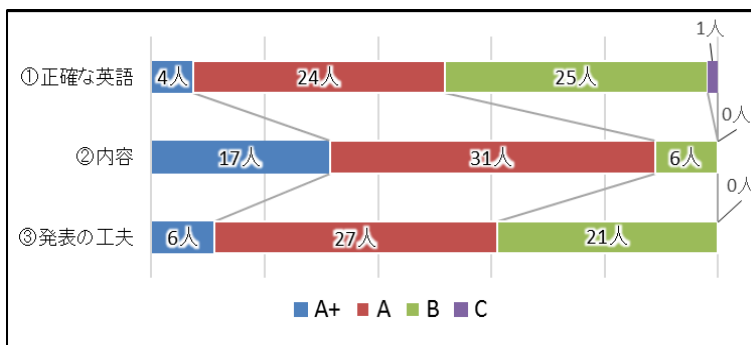
③ 一日の生活についてのスピーチのパフォーマンス評価

7月に一日の生活についてのスピーチを「話すこと〔発表〕」のパフォーマンステストとして実施した。5月に行った自己紹介のスピーチと同じように、学級を2グループに分け、児童はクラスの半分の人数の児童の前で発表した。

ルーブリックを基にした教師の評価結果は、「知識・技能」の観点とした「①正確な英語」については、54人中28人の児童がA評価以上となり、頻度を表す表現も多くの児童が理解し、使うことができた（資料13）。しかし、一日の生活を伝える表現として頻度や時刻を表す英語をスピーチで使用すると、今までに児童が話してきた英文より一文が長くなったり複雑になったりしたため、正確な英語で発表できた児童が、5月に行った自己紹介のスピーチより減ってしまった。児童の表現の誤りには、“I eat

breakfast.”の“eat”が抜けた児童が54人中10人、時刻を表す“at”が抜けている児童が54人中6人、頻度を表す英語の位置が正しくない児童が54人中4人、“I get up ~.”が“I'm get up ~”となった児童が54人中3人であった。パフォーマンステストを実施したことで、児童一人一人の発表の様子から十分に定着できていない内容を把握することができ、その後の指導に生かすことができた。

【資料13 一日の生活パフォーマンステスト評価結果】



「思考・判断・表現」の観点とした「②内容」については、54人中48人がA評価以上となり、Unit 4より以前に学習した表現を使った児童が多くいた。特に、“I like ~.”や“Do you like ~?”の表現は、スピーチの中で自然に使えるようになっており、表現の定着が見られた。中には、既習表現だと分かっているにもかかわらず、スピーチの中でどのように使えばよいか分からず、教師のモデルや【Let's Watch and Think】を真似たのみの発表となった児童もいた。

「主体的に学習に取り組む態度」の観点とした「③発表の工夫」については、54人中33人がA評価以上となり、5年生での自己紹介のスピーチと比べると、A評価・A+評価ともに増えた。また、スピーチの中で、自分のことを伝えた後に、“What time do you go to bed?”と友達に問いかけるなど相手を意識した内容に工夫した姿も見られた。しかし、“What time do you go to bed?”と問いかけた後にすぐに“Thank you.”と言って、スピーチを終了した児童もおり、相手の反応を待つ児童は少なく、今後の課題であると感じた。

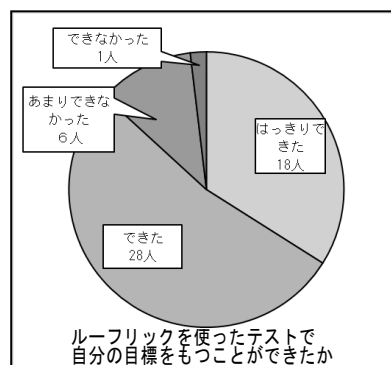
4 成果と課題

(1) 実践の成果

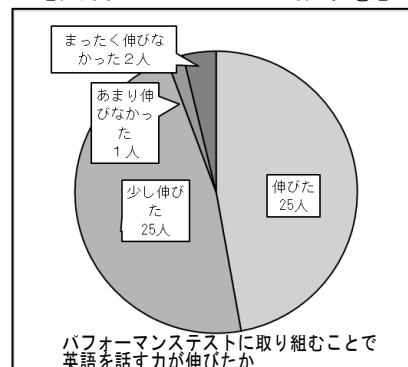
Small Talkの指導の工夫により、既習表現を使用する機会を与えることができた。1回目のやり取りの後に、学級全体で振り返りの場を設定したことで、児童は既習表現を使って自分の伝えたいことを英語で言ったり、対話を続ける基本的な表現を使ったりすることができた。令和元年10月に実施したアンケートで「伝えたいことを英語で言えているか」と質問したところ、全体の約9割の児童が「ほとんど英語で言えている」「時々先生や友達の助けが必要だが、何とか言えている」と回答した。このことから、児童自身が、学習した表現を実際に使えるようになったと実感していることが分かる。

パフォーマンス評価については、令和元年10月にアンケートを実施したところ、「ルーブリックを使ったテストで自分の目標をもつことができたか」という質問に対して、53人中46人の児童が、「はっきり目標をもつことができた」「目標をもつことができた」と回答した(資料14)。また、「パフォーマンステストに取り組むことで英語を話す力が伸びたか」という質問に対して、53人中50人の児童が、「伸びた」「少し伸びた」と回答し(資料15)、「ルーブリックはあった方がよいか」という質問に対して、53人中51人の児童が「ある

【資料14 アンケート結果①】

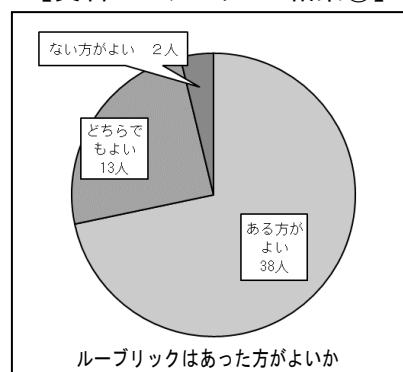


【資料15 アンケート結果②】



方がよい」「どちらでもよい」と回答した（資料16）。その理由として、「自分がどうすればよい点を取れるかを知って、工夫してテストに取り組みたいから、自分の目標をたてることができる。『ここをかんばんろう』とできていないところを勉強できるから」「よりがんばることができるから」「これに向けて練習したくなると思うから」「あった方が自分の何がいけなかったのか、何がよかったかなどが分かるから」「ルーブリックを使うことによって、自分で単元をもう一度振り返ることができ、目標をもつことができると思うから」などがあつた。

【資料16 アンケート結果③】



ルーブリックを活用したパフォーマンス評価を実施することで、児童が目標を明確にして学習に取り組むことができただけでなく、教師もルーブリックの観点を基に、指導内容や方法を見直ししながら、単元を進めることができた。さらに、児童一人一人の理解や定着の様子を把握することができ、支援が必要な児童への手だてを考えるきっかけとなった。

(2) 今後の課題

今回、新学習指導要領で示されている3観点に沿ってルーブリックを作成したが、ルーブリックの評価規準の難しさを感じた。令和2年度からの外国語科の実施に向け、以下の3点に取り組んでいきたい。

- ・ 児童の実態に応じたルーブリックの作成
- ・ 教師間の評価のばらつきをなくすための、より客観的なルーブリックの作成と活用
- ・ 単元全体や学期、年間を通した評価の実施

参考文献等

- 文部科学省『小学校学習指導要領』平成29年3月公示
- 『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業—使いながら身に付ける英語教育の実現』 山田誠志 編著 日本標準 2018